東京帝国大学附属図書館

一菊あのまきさうしの事ゆゑ
ゆかりの天ゐ[illegible]
[illegible]
ひてく面のあいまおりまゝ
なるひ[illegible]なるわ
おの野[illegible]ゆ[illegible]
ありまい[illegible]
とよみ給ひ[illegible]
[illegible]

ゆきかへりしこのたびは関白殿
うつしやい桐院殿のみもとにいらせ
給へんしのもとにたちよりたまへ
うもたまわりまうの服忌のもはう
きうつ　此度の殿さまへ中将もも山
姫君もみうとうとうとしき衣をきせかわ
きかくてい間結乃ゆふ色きに
て四ちかつひうて夕きさたの中将殿

をまわりたまふ殿ゆうしく思ひぬ
ふりあるさまわけまさるもんの花のいろ
なりしきを後見ひうちへさ入て
此哥を懷て後をを殿ばきうこかしたわ
あの心を放さう海と云事あるハ法の
たまふつ

○一
まうきさうしう此海賊まきりうとりう
事ハたまうつら服君関結乃ゆくをて
ひげ黒の大きやうの加方ゆなわ殿

我れとものハうたゝろをかりうハかの
うへにてまのあたりにそうろうオ二三よ
歳ばかりなるひめ君おりゐるよりをかりを
て上方のをうなをきて袴をはきて
中ハうかんゝてハかりあり
とゝさて座をうきぬるとゝあしきつる
きのうの雅い我氏わするか
をとこ殿ゝ嘉さまゝ紙ばきひきる
色也心ばつてさてまのきりゝとゝ
きゝ袴をはき　まき袴　ひハたのかゝ
なと付ハてさて此まきりゝよりわ
乃頃宮ゝの事あわ是ハあまきのめ
をなるわ　玉ゝへひけ黒うようひかれし
ゝもと此かゝいゝ源氏の大臣ハなる色て
なゝしゝ思ひ乃てまゝ所のむゝさきに
上ハ別服おゝあゝ此まきゝ弾正宮乃大姫
君ゝてよのおぼゝ君をもゝにあゝ法り
のくゝゝぬ侍事ゝて法子ゝとあまゝ

おりけるとこたへもなくてなしとぢい
おりぢいふるゝ事はきあけて　姫路殿
てゝ　うゝ　由心うゝあるひおりゝ　ゝる　祖に何
とかくさやうにうとうとうたるかの中いあくゝ
ゆく　孫ありこれ　西ゝつゝ　ゝ　かよひ初
ちとおとこ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
ゝゝゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
ゝゝゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
ゝゝゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
ゝゝゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

ゝゝゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
ゝゝゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
ゝゝゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
ゝゝゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
ゝゝゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

明石はひげ黒たり。まして見さ源氏
なれどしとくうるはしくあるさわげめと
をしかはてはあるひかりしたよの
きふるるさまにやすらはれ関白こと
内侍のつかさの所ふきてゆるし
くさのはるばるしせきてうしは
本の右衛門督かうこの中ぬと者ゝ
あるはまかせ弟四位侍従はいりうとせ
きすしてこゝろけきてうるう

思ふ花はきうしふわきかくる
岩もるはれ色しるく孫
とよみてまゐ一せは右衛門督かうこを
さそうる岩もる中将ひとつき稚
は事人いつとあるつへひ
かしはまうらとあくいる
てはりまをしてひわうしなわ
○十八梅かえあり巻梅かえとふ事正月
晦日の源氏の大臣は六条ゐんそあき

もの思ふ世あわれをいはあるしのりのの方
むとめ玉ゑにまの〳〵わたまふ内ゆきうわ香
とも方くへくわれてゆきあるあえを孫よ
ちんていぬんとりそあきり初のさふ
人源氏にちゝ孫ゆとくてや見孫
人世此内うちわちわるきる橘の枝よ
みゝゆゝそうんるとわれつかるたれ内入
てゑ衆乃秋よ清く白きつかるも多き内
入て梅枝ろわて侍はけらまきわ結ひつけ

うるてく社さ海よ穂白えなるひ面白
くきなきまきるかそのうり
花乃香ハちわうしえるにをまゝ孫と
うゆゝ人袖よ衆さくしまゆや
色ゝなわ燒地ゑ五衆孫松よつを
ふゝなてゆけへ
ちわ色こ分橘加え
あうひの方るいと
へやてを衆かの蔓衆部つれみやを
りんしわまそ内ゝくお多きものを

心のさまを作りたきものくさく梅花むら
さきのはなうくいふをあり作りふるさとの石
上乃合さ作りかきうゑおきう花ちるさと
をしう源氏あり作りまもくくとわ
くはたをもろしなりうの梅をもき
ものあひておもしくちるきはみ
きもとまりてうやゆふはをもわ物
よ多きものをもわ作りいみやれ内のふ
さふりを作なりぬ神ようなりて

うと何やまうちよ人屋とうゑん
はけんわ書源氏物車にをる袖に白ひて
ゆうゆうと古里人も待うゑん
花おうきをきてくるる思
梅かえ燒地ゆとゆりまり山寺おとえんあと
をとう今を作巻さをあふしみまも物
ゆゆあゆゆとゆりまりあゆゆ遠さて白
ふ心なわ多きものくをえいなり又ぬ
きもの成みきハうひとをるりを

へ一毎年の如く夏冬ともいわず
うゑむ事をもとめひに志ゝひ
てわゝり殺ぬ志るゝうゑ出るあるいは
内裏ゝ殺ゝいあり
ゆゝしもあるへ一花ハ梅りえはまき
あるへ一ゆゝくまてもゆゝ梅た花物も梅ぬ
花なるゝ志と云なり

○十九　花ぬうゝゝけまきゝちりうゝ梨
とゝ云ゆ一雪井ぬ手わひめ志ぬ夕きわ

大ぬみとわ乃ゝてのむゝうゝ殺りひ
えゝて　年ぬ山るゝ　ひゝきゝ乃父ぬ
大ゝゆゝ一ぬハさわりさゝしもゝへき
あゝ梅をゆゝ一ゝあゝん乃海ゝ殺
ゝて大ゝ殺海ぬにゝちの花さゝわゝ
中ぬをゝひ雪ゝ殺ふ海あゝひなゝあわ
てさゝ乃きの井てゝ大ゝゝちゝうゝ
梨とゝゝ一殺ゝ雪にゝ
殺ぬさゝ殺のうゝ梨のうゝとけて

天一思ひ〳〵我もたのゆん
こゝろの心あり おりひ孫えくむこと
やわらかんの心なきまいけうはなく聲を
とゝてあるまのくそくしからら
ふ三宗のうへ天皇井孫わの内事
なりあまる乃内子ゝと出来孫ふ志ハい
四月なりさて孫ふ月あれ
那きゝ春文ゝまゝわ孫ふてはけるを
あさハ源氏代内ゝうゝくなりきけいしゆ

ゝ孫ふ孫ふ孫ふ孫ふ孫ふ孫ふ
宮ゝうゝ孫ふ内毎一孫ふみやい文ゝ立孫ふ
内石孫ふ中文ゝハ孫ふ孫ふ天王天皇孫ふんし
を孫ふわて六宗光内んとゝきくゝゝ
をきいめ孫ふゝ孫ふあるまゝ事
ゝ孫ふ孫ふ品人ゝなわ孫ふてゝ乃ら
あまハさゝあゝわてゝいめゝうにめて
ゝやてを秋六宗孫ふんへ新やうかう
をなゝ事わ孫ふ内多夕きわを孫ふ宗和

御一を中納言なきうち落くるもよちに
うゝゝの巻い源氏殿心ゆき殿に参り
まきせ又笑やうりうの方わく殿りろ
りいきうろの御ん殿とゆ内兄きゆ
きやくの人うて殿しゆきやうは
人うしゝゝ禄六条院殿内子きゝちん
院まんて殿まに内さ殿ゆう為ん殿
ゝゝきを内語りていゝゝゝある
し殿内座殿ゆをさを院内内さをひゝ

をせさを殿に殿りゆ御やうお事殿きう
ゝん殿して付さ為ふまふへ

○廿　五ふ殿ゝん殿きをりゝをとゝゝ
事ままゝゝの内為殿為ゝをひげ黒殿
大殿学ゝりゝ笑ゝ二ゝまうげ
きゝ殿ゝを四月廿三日源氏殿内うへ
子月殿殿ゝきゝ殿ゝをゆうゝく
きゝ殿ゝまゝ為ゝだりゝ五ゝら
殿うりゝ

義経さしかゝへ小松をひきつゝて
もとゝいりし城郭のかゝ
屋よりみかへりわかせ事六てうおんん
小松原すぎたよりひゝひろかれてや
のへ義経とうしをぬむる
ゆくとうしろ引かゝるわかい心い源氏おれ
かの心猶えをおりまてうしろおかへ
まこと鶴八四十おとうわ十ゝみぐる
年ゝとゝひて貴大かう志を

をこゝろひかくをとゝ乃へ一門れかの大事
に彩をするるを見に成先用信おり
みの侍子よ志かふ成ふとを子ハ ようう
へておりゝまゝうわ日と氏四月おり
子おり月ハ子乃ひとて野屋おあうひ義ふ
成をこうるなること毛ふと義ふれ
ふへ志乃とあわさて保へて用信おり
みを見事わかへいと彩ひまゝうわてもの
くゝを見るうひあり侍さまと源

氏かりまのぶ也 笑ふえんろうひあり
おとゝ山ふ事うゝ事うるまうゝ ぬまう
つゝなともう法かとりふ事たいのら
を聖るうゝうゝ祝乃事あわさて此まき
ふちかうゝはふ春えに まのふわ孫
法むとめたくあひおりまゝ笑思うゝ
孫ふめてたうゝ事なわ流を
あり此海ふとゝまゝ一をヤ法へ
ていりうわなわ事んはふの孫ひふの

うゝみちあ山ふこもわみやこ
へむをのかゝふあまの思のもとへ
もふまくゝと文う義てのかす山人くの
孫を我位吉ふ玉 ふ孫みをふゝ第
ふ入てふう繁て女
ふてゝふあかの位吉
位わふまあ内あゝ
ゝてみゝわ一ふ笑ふ
笑ふわあん孫法寺
う法ふ思ふ法ふ
ふ入乃ふ孫る
きちくゝ成ふくわ

今うゝ殿のゆめかたりする
也夢物語乃ごとにつきて人あわれかうも
山〻ゝ海ハ夢物語乃石の巣原ごとかの
事乃ごとしそれ女三のみやとかたるしい
志ゆしりや　ゆんたん殿まさにかうまし
あまるれ中ゝいんぜん院乃上殿わかるゝ
ゝ殿かりめてゝ以人海ふやゝ代物も
也らあはゝい心そなる志ゝ殿てゝ六条
院へ山みやをあるはけ事わ所乃六条院乃

と四十代名せこゝ遠世代まつきおかゝ
ゝハ木乃右源門乃ゝうゝ殿ゝ立かか
ゝ天ねうゝ殿ひ人せかるゝ源氏ゝ
あひ殿へふとあゝう美なる上に海幸す
ふるゝて物ゝんゝまゝ殿ひなわ志ゝろ
うゝ美ふ代下也ハ上ふ海ふ代いゝ殿
あ殿ハ月ゝ也山まきゝ源氏住吉へ家
殿ゝんゝ小ひめ君あ家殿美きゝまうけ
殿へうゝと云ゝるみやゝ五ゝて春宮ゝ殿也

祇園の社に詣でゝ
ゆきかへりの道すがら
をかしき事ども
みるにつけて
のどかなる
春の日の
山の端
ちかくなるまで
ながめ
くらしてゝ
かへりぬ
その
夜
あまの
夢に
女
出
来
て
申
す
様
我
は
住吉
の
神
なり
我
を
祭
れ
と
の
たまふ
夢
覚
て
神
の
告
を
思
ひ
合
せ
て
住吉
の
社
に
詣
で
ゝ
見
れ
ば
社
の
前
に
大
き
なる
松
あり
其
下
に
一
乃
石
あり
其
石
に
腰
を
かけ
て
ながめ
やる
に
海
の
面
に
白
き
物
あり
て
来
る
を
見
れ
ば
一
艘
の
舟
なり
其
舟
に
住吉
の
神
の
御
宮
を
乗
せ
て
こ
ゝ
に
来
る
と
思
へ
ば
社
の
内
に
入
り
ぬ
其
時
に
夢
覚
て
心
地
す
る
事
ども
を
思
ひ
合
せ
て
見
れ
ば
夢
の
内
に
見
し
女
三
人
や
我
を
祭
れ
と
の
たまふ
事
は
上
古
の
人
の
事
なり
今
の
世
に
つ
ゝ
六
条
右
京
院
に
ゆ
かり
ある
人
の
住
て
ゐ
る
所
に
ゆ
かり
ある
人
の
庭
に
て
ゐ
る
鞠
あり
右
京
門
に
ゆ
かり
ある
人
の
家
の
前
を
通
る
に
宮
の
かゝ
り
を
張
る
に
祭
を
設
くる
わ
ざ
なり

孫これをひてらうろを見る所中へ入
てさしをけたこや立ぶくへ見る女三ぶ京
乃方ひろくと云孫この御ようをみすあき
てはひろくえぶふを打痛と成あきまし
うり事也つ井ゑ紙宮ぶさうゑ孫を
ひろうろ小ゑ志をこうえ　孫この縄引
春ぶ賀　鞠立ひろくりやのろうふ
と云事を八ーさて太傅門乃とけうや孫
はめぶさうゑ志をいひー　女房さう

たうわあまいかうしいようわてみこをやる
見りきりりゑ我わをうまて孫小あうわて
うまうわ四ちわひーくぶと書てやる
小侍従こひうぬ四ちてあふのけ
くし孫とうわりきうれ返事やわし
こうわうをりきとあをさわうて四の入
ぬ事をひの也うくて小侍従をあうまて
かうして侍のにありを孫うわい四月明日
つうけむうさきの上方みぶひていと大

事なれとけ長い
えてはたかるとおり
はらわてあるせうめ
りうと形見を原氏をかの子見るつのすと
なしにあやみ形へをを見をむしさきれと
乃内変りきあひこみのうなん見心
ろろくあり
きんはりまし
きいへ変き面くろ形うろしをあ
くあひなまりそのあ東右衛門れうの夢

我みるわしよりトヤをいさにいろと
形りてれ月もありを見をしを形りし
まをきあ乃保とれとうえをうこ形ふ
うやを保めてなくさめさを形ふ親
ふいとあつきれあ神ふ風立てむら
内きの上の俵ふてへ俵わ形りんとし
給へを安之乃変内なるわ形りをや形
一きん月まちてきとりふるもろを
ふころまへハを男にまやとおほめし

ゆゑに行しをて七夜そとくまゐらすこの
うるわ本なり
夕やこそたぬとくし侍き侍て
うへま義でおもおきのもへん
とらふ音のやなわ七夜とく免れたまへ
もあらん其ゆゑなりあるさまさらずまし
にくかなしさそあきらくみの経ゆ為り
給ふ子らんしのかハおわを落さき給て
ものめさ為終ふに源志呪経此ぞなり

あさみとりのいはやうふの露うるふこ
あわあやしくてれかくれなと御覧する
ところまそはらんは達あさらく思ひき
あしうる文まりふつくもあつ姫様
中納言此まえしたまさのるあひあわて
ありて源氏ましなりれ給ひさくるしさ
まりきこゆるあり源氏給は心の中ゆりけるわ
りたらん小侍従はりこふとく將てまいらわ
ふりし文此いろいろ文を清遊んすまじ六条まと

なくむさぼりくらとなるやうにして
りんーーこわ殿氏てあらしみやまとひを
まもるさまーー孫を入殿氏ーーかたに志
ら孫乃志るを亜そわーー光乃つまへいとわ
てあるに心ゆくまうあんうくーー光トを
きうやうこ市源をうていかうんを女ま
そのかとのことは　うみわれうすやう
乃久　志と孫殿下　あうりうくあゆく
りの事付うう殿氏八月りうわ

まうて清のたそのちあひ殿以す人志まぬ
浦心乃中さうとありまこのあきまし
きそわうあ氏女かくーーこと女三氏
りまう右源門おかみあいさわさ武
なわ志ゆ志やくゆんて氏五十四加を四子
まち氏とめ殿を山女三氏みやをとめて
さのりわたまりをへに源氏殿氏をとの
おりまきハさわとれあしりりーー殿りんーーー
清を殿事氏あるうー安まひて

もとよりうつくしかりしかたちをはじめ
ときてとうるを祖にうつしてかきる畫
かりしかたちまつわかをさてうつし
えてなりひとうかをもしりうけへたる
人もかりしかめをまつかなりしなつ四く
心うんうてあはよりのうつしにうつる
小内かくをようひをまつてはかくあわ色
我女三位文きんれいうむきのうへ
えをうん女内侍ちやうのうつしかり

うへひハ源氏しやうかりしかたちを猶ハ夕
きつれ位子とひけうつるかたをかれ内をを
うつりかりうつりかきなれ侍ちやうへ
ちをかりさてかつまもとつくつ
かりけしそかかりかりをを花ちなん
さてをかりまつ女三位宮ゆかりをつうき
かへ二月中ノ十日ノうつる青柳ノかつう
ふきうつりてうつくしすかりをせい
もつひきぬつ女ちやうをたまふ

梅の花のうたのにはたゝ右ふしぼきり
うわて御ハいとゝ孔きぬ海ちわむしゝさきぶ
正大きさなとうき紅えやうゝひあゝ
まかりくあゝわるゝりひみちて花とい
りゝさゝゝるゝとんて春のあき初のま
りすゝぶまうわゝ四ハ櫻ぶ四ちひを
うかきわなき徳内まなわ母俗の恵いあ
うきゝゝうわあゝゝよなゝふうゝか
くさき白ひゝうゝのゝらゝてう

あわてみゝ孔ふかゝ仏中ゝあゝ一代
正ちけを内へゝ高まゝゝもあゝまり
をりて清けて春まのゝ花ゝうふれ花
もみもを御わゝか
をやうき乃ちゝ心ちりたまのゝう
ゝうゝいあす髮髻をうちをきて角はや
につひなゝうゝちをゝい祢ゝや
ようハひゝいまゝわゝかうれゝを白乃
にう地へて付へ仏まきゝ形ちけの宮

といふ事を見て女三乃宮を右衛門乃かミ
あひまゐて後我身ハ捨てまかりし
たる女院のミやハあの女三の宮の御孫に
しかるにハかれすちもあきたらう
のかうしなわ志ゆしやくめんおよし
山乃内寺へかくしおきしてうつろうせ
給ひしうわ三の宮ハ源氏給りわ給ふ
右衛門のかミもみやうちなくて大浪給
我ミ給ひしハ此女二の宮ハ我給わて

おりひミえれてさらめしして三の宮ハ
みさしもをとわ給へるなり 哀ひて
よみしうきり
またりの藤葉をなのくゐろひろん
若菜もろましきか何まゝ
此後給ひしうわら給ひや夕霧藤裏葉の宮
とやかくらうちまへやりたハせし人
まわをの子住まのひしうわなるなむち
まへみやといふなり あわ

○サ一　しちき　あれまきかしきに
ゆき事りつけいうんくをふうふ源
り右京のかみ　いまはしら
うへ　きうしきとりの妻かも此人
をはうしいきとうくわさてらみ人也
三のみやおうと所に病所になわて
ゆきのいわ行わ大納言よなきる山人きす
きる事うひとふふ源氏すう心をかの
りて酒をこのみてようみ内つひ

をしひ行ひうわうう後おをうや
ゆくしうをうらうきうしうきうせ
かきうわ行わ枝心きうれ小侍従をうひ
て文八ト
ゆきのをうてもしん煙もれかの意
てぬこうひ行花をやのこうん
をトうう四位事に女三氏こや
ちうひてをくや死きうき事我
行ひおうるくうの里うくへい

光あわをうち出て三代実録にはかくの
へとゝかけまうしハ来たるよわきことは
此病のうちゝみやうかゝるをたうミ
ゝなわ源氏八重山ゆゑ人
乃おもりん事幾ばくのとしを経て
ゝ法のたのまるゝと立とまり
たまゝ事もなくわ〜ハやの心
のうちに思ひ〜きゝ方ようをを
かけきゝ〜ゝ〜ゝ〜ゝ〜ゝ
ゝもたり〜まゝ事ゝ光もゝ法のけゆゑ
すて〜ゝ〜ゝわとたりめてから〜ゝ
てよとかりめてゝ〜ゝ
ゝきゝ〜ゝ〜ゝ〜ゝ〜ゝ
ゝとわてゝ〜ゝ〜ゝ
ゝ〜ゝ〜ゝ〜ゝ〜ゝ
ゝてかの大納言やまの
ゝわ乃四ゆゑ〜ゝ
ゝむう光ゝこゝ

う也也いとなりうりていようひらを
てきまくいひをきは親方の事をあかる
きしいひ男てほのよおやあとさき立
てうをぬさて女立のうやハ心ちすう
よくなわ所の乃美君うくおりて
まをい源氏い空ありまこるおりめて
かしほきをかいのおりうひのおわか
乃美君を源氏のきいうきて宮氏の殿をへ
人なれまうもきしようせ殿氏源の事

なる世にのうきをまきをと人とうと
いくゝ岩松殿松いこうん
空乃まのしいふみやいよかるいくうら
しくひきみ殿へ見きこういうくく
殿けの見ういくゝ岩松殿松とうはい
きれまう家ふかへくおわ右源門のかこう
を事変なるいこうきいう文右衛おけ
き殿のうう
本乃下氏きくよ ぬまいこ方 方面ま

[illegible]

○讀歌　[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

○廿二　[illegible]　[illegible]　おふえとゝ変い

右廉門乃[illegible]

[illegible]

右廉門うをてらあるまとおりしに

中乃[illegible]ゆきてわ[illegible]天乃一宗

乃文へあるまに[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

乃まうしの方にまいりたまへうと
をとこの申して大きやうふかくめなるまの
ふを見ると右衛門佐のみれそのあいさつもら
てまいりたまへりしかはよ宣ひ
さてなとおりひ申してさ光源氏の
さう源まんを呼ひてうちを
わわかくすかの方へ思ひかけかく
かかるさまなる家つくりをひき
ひろけなるを打四うちあけらるる

うあふえ殿をたまへいとくよかはぬを
ものくるわりくるわりきき
見やうるかなわさそ此屋をは屋うそ
きくわものにかくて大將殿の事
ひをもんやうせいこんれいはいかく
いひたわ大將我内屋やと三条殿へ向ひ殿
てのまきろ見さるを右衛門乃うと
ろあるひたるうるを思ふ事なかは
きとひて寄り

一ふえ行小唄とる風流なりなりけ
末乃世ちき様ニはしみ那ん
とりふ空かりんをしうい様ふえ找末れ世
ゝは加加る大しやうる繕んよとなわ
はおにはしみ孫ふさてうかる大ね
きはらこふえ我大きやうとふふ事しあわ
げき心除へしうおれとのこえうき
つうんたる道　蔵え　夕きわさてもあの
まきより僕よ二よありふうし八本

一めくわ方へ佛事しておやもちかきわふ
くあげきとふしひ孫ふ六てう院いさまく
おりしめし若事さんあるまにおほしめ
しては茨君の水ひるよわとむ孫さし
たまのひてうま百文の文りしと法りりき孫
うわけも茂人ハ心我きしてそおやうら
をりしめてありまし小うしけぬく流ふ
さけとよろひ孫ふ金と云事あしハあ
これ赤まき人こうきし孫なとこひとうふ

て又此まきをよたりんなとゝ申事あり
こゝ申しやをゐんおもうわ竹子浅女三
乃文徳をしおろしてゆをれみやとゝ
ほうこうゝまをさをゝ申へまをしを山美和
とわ書てあるひおりとゝろもうひとわり
ゝは　乃けおを　必ゝろうとゝ申事を
ゝし　すむ　ゝとみすむしゝとゝ云
事ゝ有十五夜月　月ゝ行ゝ流くすゝ
わゝうて所わゝくあゝ所ゝ流れ六てう

院ゝうゝ申きゝあゝあゝ所ゝてゝ入をの宮れ
ゝ入おゝまゝて月四流するゝ申ゝ孔
きんさゝゝゝ花ゝうれゝうる中ゝゝゝ出れ
ゝゝゝゝゝゝ所ゝ流れゝうまゝ
大ゝゝ乃秋をゝうとゝ入ゝうゝゝ
ゝゝすゝてゝきすゝ盃乃こゝ
先ゝまを所ゝをゝわゝ所なゝわ　月ゝくま
ゝ　ゝわ捨ゝゝまゝ　すむゝなゝく
ゝゝ事ゝゝゝ

○廿三　ゆきて

山ま斎ゆゑ秀わとゝ
事ものゝえて後ひ　ゆゑなわ
あわゆきをの大ゐなまめ人ともゆ
ゆあわ見い心をゝ後うひまめ人せ
雪をゝ事あわ

山里のあれ後ゝ久きを小
立おんかゝもれ雪ゆら
をゝ月　かわゆきあ風にう大ゐ
後ゆきわ乃大志やう見を以ゝ

大將の小野ゝかゝひちい枝一条ゝ
ゝのみやゝゆゝく心をゆ後ゆ保ゝ
ゝ後わゝみやひとゝう一てう後ゝ
見らんひき　人ものゝゝるゝゝて
心ゆくわゝゝ　わ　ゝみやをる
つゝ事わて後乃ゝ山里ゝやう枝折
乃ようゝやもら後ゝる西へゝわ後ふ
大將い見志のひゝ不ゝ後わ後るゝて
出後ふ後ゝ秋ゝ秀野山ゝ事見

すこしあり侍りけるをきてまゐり
侍りけるを母宮にたてまつり
まゐりつるのすけ
ひきつるきぬ小袿
しるべとりまかせ
ゆかきわかつくえ
むしゝ社ものかすぬれ
なとゝ宮あ侍免あ
えなれ四ちて

野山　海人の釣舟　遠かきわ　雲澤き
乃言　焚火　かゝ山　むり社　たき
事　ゆ八侍ゆ　ありけきとわ所の小
乃人　みこ事わ海乃事　ハうやいと
物うく　うくうくたり　りてうき
りうくをんとゝ　みやゝ　歌とる志ま
を通して　ゆ侍ゆ　をや母れんし
侍とて　ゆ侍ゆ　とれゝ歌侍ふとき

まきもの、よそ様いをのへ、あたり、まさ
さわ、紙尺やすあるく、きはみ、い
さてさあわ、八、うひ、東うるうやゆ、
ゆりひなきまて、いとくくらもくる、
くりわさてく、清のにかくれ孤ゆとく
清さ、ふうわ、文乃市、あかふさて四
十九日過るまに、京へもりへ、なるまに
ま強て三条殿のん乃上と十五日はく通
ひまのひ、なわ又山巻よ清るけさ、ゆ

とゆふ事のそれ、ちけ、ゆ文、けつひ、絵ひ、ゆ
絵法ゆ君とゆひ、、世屋いみやところ
ふわ、越わあまけ、かくきたるひてうす
墨絵めのもく見たるもう、衣ききてき
ちやうひきうせて大、、ゆうへとつひい
ゆ、ゆるう、對面せ、、なわ山面
まくる清ゆ、筆申、ゆわ文のこと、きわ
ゆ、、衣いくもの、、ゆまに、れ、衣て
ゆそ、、うる馬なとけ、かく急きところ

かくれ我おもかくるゝ所ぞ乃ぶしや
へるこゝろハいかゝゆきてあゝはきあり
へるとゝ家重と　乃ゝつまのひ　なわゝ祝をを
乃ゝ後ゝ家ひをゝるうゝ　ゝ乃くゝうゝ
ゝ事をゝ比ゝきゝ秋ゝ心ひへ

○廿四　内侍　ゝ社きゝ乃わゝ云事
むゝきゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ　ゝや只大事ゝて年
月かゝゝ也ゝ祝ゝ　ゝ多部　ゝ内侍花きゝゝう
乃ゝゝやゝゝゝゝゝゝゝゝ大ゝゝ乃ゝあわた

きゝ乃きゝゝうたゝゝ祝ゝとゝあわゝて以ゝとたゝ
ゝ　婦乃ゝ乃わゝ祝ゝをかくゝゝ
かゝ祝祝ゝんゝゝゝゝゝ比ハゝ
世をゝ後ゝゝくゝかゝめゝて後ゝなゝも
おゝまきゝ寸以世ゝ夫ゝきゝゝわゝゝゝゝ
ゝ祝かゝめゝゝ祝ゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝ乃ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
をゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
乃女ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

らうく御心おわかとをおもしきあるらし
く思ふ人おわかるゝ三つ子といふめ君殿
夕をそれまわ孫へハ兄弟さうん渡と
の事ありましまして三子殿德あふすんなり
て殺めくなわうりん時ハあれるめいよ住
孫氏て此梅と櫻とうる男小とわ三つ子へ弥
孫んと中孫へハおわらなきにちころりも
ばくおしめる所わ孫氏て流神殿まさく
里くまきうりもちたまのふさそふ末

まれにおしの兵部氏うやうらおこいり
住孫氏志らつくてむけずしたのりしけ
みくおゐ孫へ冬中宮めてたまふ此ちう
くうまうら後津中垂孫氏ぬうりんおし
おきありて中宮に第番志さてまつり
孫へ大院内覧してしるハいとようあり
此御おもてハおとく参りや出宮へそむく
きまきのうへ
をく出見し顔うちうなきともすまし六

風かうるはしく萩ぬきたる法師
光よみ給へるなりうくてはをあてきもの
て月はまだかとよをあかくれさせ給ふのん
乃内心は中思ひやるべしやさるわ
たのんせかきわけ内まいきるうわくを
はいかゝ〳〵おろさんかくその内かり
するゝかわをゝこ乃むゝうわて
なる程ひてゝかまのハうきかゝへまん
時賞ぬうゝ後生のゝひ夢うくゝもわき

まんてもおぼゝきるものゝ所もあり
中ゝのんゝ法心はよくもゝあゝ所はて
大ゐは思ゝ乃まのゝ所あゝせて事をこ
ゝろ所ゝ所大ゐむゝ野わきは
ゝたゝゝゝ風おまきを小乃うきてみ
事ゝ所あきゝかいゝるゝ世ゝかゝ
ゝ所ゝまゝてハなゝわゝきわゝ程
ゝゝゝひをゝいゝ今なゝて法ゝ
覚ゝて何心ゝゝゝゝ所ゝ後加

をぼくく笑まわれるまわるは笑わ
さしうふ心ちしてむ一きれからら
我ままもあこと入四ちをうりわあわ
しさてうあくいよなをてを用
くの法佛事を弥あわすあきあく
風は多さもくあきたかきるは心書
大原よわ法つしあわ
いのへの雅さんとの心をして
あまうてを小歌うをきう

空あわは心は大將はりく世うを弥
あつしのうんあくれまのもは比は
事をはおあめおしてようを弥せ
ことにあるまうやうくおあてい
返事は
はけさは首あとあたもあ
大る雅の歌ようはくを事
空寂しなわ世おげまうは山みは
乃とはいて弥はくおりめあ

うゑ人々はくハをあかきうしわゐん
事を行りて見やうんをんをんを出
やらひへうそうとしてゆ見て行る
ちくろ孫ちんう雪うくれもこれ信
ふけき故そう秋うのむ中京ちわ内
彼あり

ふしを信ろ乃へをうしとやな紀人れ
秋ま心をとめ内ろ乃ん
はむ〳〵さきのうへい事れあけかれを

ゆて孫ひ故ま行かくようてなくまわ
孫ハいと故ゆわてう見〳〵内信ま氏
ま乃れ秋のかかうき心をけへ信信
乃信花きやうの内をやうハ事なち内わ
うれを八月信東也まことや春を内信ま花
ちる業乃内うこへ内つひあり内逸事ま
結ひをく契ハてし〳〵天かる氏
のこわちくま春信信ありとも
とこうるもをを祝乃こと　このわあき

くまさ社後　あきの別　そきすつるく波
うみ　さとゝ山ゝ　山巻ハなりく
ゝひりゝ　ゝ海くも別孔事あわ
○ゆふ　ま加ろ　山まき海ほろ志とゝ云
事ハ源氏あ乃ゝ行りひ　よあけきゝ孔て
ゝゝとゝちふゝめて
大ゝをかゝふま波波　巻にゝに
見ゝあ丸玉ゆくゝ濃ゝをゝ
ゝ見ゝよ見かまひ　ゝ奇ゝゆハ也　ゝれ孔て

又乃年乃春の日ゝわゝ見所ゝゝも春
ふ心をゝめ孔ゝ事ゝ行りめいて
あり孔に三宮乃か乃かゝ見ゝとゝゝ
にゝくゝひす社ゝきけゝゝも志ゝひかか
ゝてゝふゝあ孔ふゝ人ゝ孔ゝ　ゝ志ゝ
天ゝ乃りゝ　ま加のめゝりさ孔ゝゝやゝい櫻
きゝゝゝれて本ゝ
ゝゝゝゝゝ櫻ゝ山ゝれゝゝゝふ
ちゝゝゝゝゝあ孔ゝゝゝゝ櫻あわ

[illegible]せこうふあるを
乃歳うんかちやまの[illegible]きはしらけ
よひらけそめはくもの[illegible]
まちしるあはをそんよりかれて
とはそあるしやんなき人を
うゑ[illegible]
となりめ[illegible]
愛乃宮なりまのかわ修[illegible]
にうはふきはひ[illegible]

何ようの事乃ようにもあめうん
とよみ[illegible]もあるまゝ南[illegible]
まか[illegible]春ようこそ梅[illegible]
事をつゝ五月雨小[illegible]
なきに心をかよ大[illegible]
山[illegible]
乃ちもの[illegible]

なを人をこのかるひれ[illegible]
ぬまてやをつる山かと[illegible]

又かものまへわさは心まし八のことあ給
我おりめし出てたまさりしくれけれは
君とかゝりし女房ハむらさきの上ことに
おりめしより人や源氏思ひくおほ
めしたりとも紛さみてよわおほしまわ
しらいおとけれハさりし有出形見とら
あれそさ此人りと清読てなきひとや
覚しきんまつ里のはのるとちるところ
へおりしまわ給ゆあるわへる

下おりしまわ給ゆあつかへるり
かたくちうあとあつひを御覧しつゝ此り
さしたる名さへまたい情さわ無るとき宣ひ
けれは中将
雲もろりそそる御気ほとみえくはかめ
くものゝさしら名さへ志賀那
と申しそりしもやさしりしまなり
はくりしそめ御墨をきてたまふかとりと
うまし寄宝乃三名かふ咲う給ふ少室川咲

ひとつのを流らんしてせまてんすりか
きるとふ思めつらしうぬしる書さん
おりめ　おてやきうとも形きとうう
みなふ七月七日六流あるひもの
りあひろる人をなえるとうハせ流
ちきをあおり　めいて
七夕乃あふを恋ものうらの見て
月のれの遊る流遊をきうふ
とうらやまきまふ　ふりくて月十四日

此一めうわなれをよてひものして
あくうを乃まんうう玉きうれうう
ををやうさを流ふ中れえ異あふ貴す
見らふ流なるをきハもなき地を
けふを流何乃はて定ふ流ん
定書うわしを出流ふ雨心流中内
ううれうふめ九月九月六わるれひ
うるきくを出流てもひとわたるる
から流れかとかふ　足折ふ神学

月の光大方なるなり多くてまほろ
ましかりしなるべし十一
日とよのあるわれをちゝ人きす
むしのるゝおもひかてひのけも人くす
ゝひ形ふけひとけ形んすもも
ちきは心うやはおふ二三人さゝふハ
をくはりくとも屋わすて形ふかゆ
すまに別れおわる秀くハ形ハ
ふゝ乃くゝ心まのおやうなる四すゝ付を

けるあとハ千年ハ形るみ也くらに
世なるゝ形はまゝ戒多ゝもあけき
形りんゝをあて形るゝ月
流る涙をまきゝゝてゝうあゝ
む道まのくゝや受ゝんまきあつめてひき
ゆひてつを形よ

うきはあてゝうもゝ寄りほゝを
おあ一ゝ年乃童ゝわゝをあき
心ゝゝ形まゝ心光中形りゝや涙も

きんかるあーさむき春は山ひとわ梅は
ゆるくひられたるまゝをけてうつりて
庵をこあしたゝ孫ふま言はゝくわ
きもむきもわわ多きようつゝこゝ火炭を
うーて炉火をけあるに山ハよわ
乃ゆ代思食中うもつをおうやえわ
和孫ゝうめうはえ色うも物
孫をさわゝた為ちきゝ孫のわきやとこ
此ふわて見くうわ為ゝ庵きよち

やゝ代きよ方さんゝ
孫ぬゝたわゝ神をひきう
修ゝたわゝ山れもけ山りんん世ゝ
みうんとうのをたま奇なゝとも首
をゝうわりゝ孫ふ山ゝ西ちる
りわ山わ為ーゝ山ハ山奇ゝ孫ゝ
人ゝ孫てゝ西をうれしゝうあきてき
いゝ今佛名ゝにうゝりゝ空ゝ行り
ゆうやたうしゝよ きの庵寺孫てうゝ

うりのまま山ぢかくちりのこる花やう
廊下うつたうしさうはきお須よ
春まちの命も三つ[illegible]雪ふるうちふ
いろはにく梅を愛しありさうてん
雪をミまゆ小うくわかく花ふ徳
心おろかなる月ふ月ふ引おものしあうち
うんうちめなものもうさてとくろへを
うを給へ見みのわまかろ一二巻いか
多あまりおり詠きまゆ見えらわわき

うろ事形

○廿六　雪かくまは巻世にかくまし
大文くもくく稚いとも世いふ事あまを
光源氏とかいくもかくまうあ多らわせ
日うわかくくこひの板形とかつ
○廿七　かほる中ぬうをにかつ兵部てふ
まきりかつはまきうわるたほふ
りのまいハ三乃宮とかてもしきふ上
乃やかふ　まわうまして　梅桜ゆきり

彩りハ四石乃中宮ハ四ちゃん
一乃浦まこ山みやゐん内くしてい
長部てのみやとゝ申ちすゐれて浦
心ちゆやうゐゐくしきまてうおり
きゝけるかゐる中將ゝかの女三ハ
美ち人めゝ源氏の御子ゝ申ゝきき
乃殿大納言乃内ゐ申ゝ此君ゝ宮ん
山くしてきゝをん院い此君をはゝを
りせ彩りはよのおゐゐゝ乃かゐゐ院

小乃こさゝゐひてゝ泰々おひ方ゐわ
をのつゐゐかうゐゐくてゝ山ゐ乃かかわを
ゐゐ名ハ三宮ゐゐ屋ハ彩ゝて悠こ乃ゐて
ゐゐハまゐきの梅枝かきて浦方ゐ山
夏ハ花ちちゐかお袖のゐゐく將ハゐ
れゆく蘭の花を云ゐ菊ゐ乃ひを
乃はゐ彩へをのつゐ浦自ひゐうゐ
彩りませゐ人ゐゐ源ゐ兵部てゐ人や
せゐゐるこゐ内かゐゐ源氏乃殿ゐは

立つき人乃心をもみて　ゆきさきに
佛乃かくれ給へ　乃ちあわん世にいて
しを　こゝに佛乃ゆきて　ゆへ給へ　生死思ひ
ゝくせさるまゝ　乃ゆめかゝれなとハ　白ゆも
付つゝ　まかよとゝ云事　こゝかゝ　ゆ　あつ
ゝ明ら　並に竹河山　まの竹乃ハとりの事
こけ河の橋　ゆ　一ゆ
ゆ　ゆ　ゆ　ゆ
ゆへ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ

乃ゆ　ゆ　ゆ　関白　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ
ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ
二面　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ
ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ
ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ
ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ
ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ
ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ
ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ

奇なる又用比夕きわに大臣雲井に
うわの御服はいかなる美人にかのぼ
と申ひめを心うけて夕雲の申ひめ
黒髪の様をうけものして裏とうるさ
所をうてしたくさに話をうけるわ
行河のことの事を成へて河　まも
乃夕雲　うにかくまけ　花に通もの
うひまみ　形とい事　我行ハ一さに
花申人へにうひもいうる事をうて あと

思ハれいせんのんへまいわ行ひて美黒
うとおにかいりうとの君を用へり
乃用侍のかゝ様行のえて用侍にうに成
行ふ　なりひに藤こうに巻こうえい
い事をにあをちの大領言と実しを
右衛門のかに見にの形をうりよの学て
ゆ人を侍もりへて時に人して
ま一度る大臣小なわ殿へに藤に大臣
とも申人をいつ小ハひくくろに

大殿の女かのひとわれはいかゝ人は
さうさうまゝ木えさうはきゐ神さて
きしひめ君なれ兵部卿おとゝ
感てをみやかくれ殿てはこの殿へお
ゝ紀宮のはかうえよひめ君一品おり
まはゝうゝ君遊にえなしはれ殿きき
お梅あわ見をこうをいえ方宮ゝわ
さて我紅梅とゝまゝらゝ大殿ゝらお
む兎乃梅君おも白東をおわて市子笑笑

君ゝさたわれてんしやう乃かとなわ
しをはつひまにはつ兵部きやう君
うやはゝうゝハをれな井れうはやうに
ゝ書てたゝまわ殿ゝ
心あわて風おかはたの梅は
まんうくひあとゝすやハ有
とゝさまゝわせみやゝくゝうあわ
てかりめてゝ小文ふ宮あわしたた
まゝと歌ゝもゝ四十四てうえかま

すまわうえおかかきくけこさしすせそたちつてとなにぬねのはひふへほまみむめもやゆよらりるれろわゐゑをん

きうあるんうばくわ入うるゆアうえ

きゆふんくのあるあわゆえわ行川を

りゆ書ゆ母ーうとゆまいろんすんうえふ

○字治十てう

○一　橋ひめうゆうくれ海きせゆるし

は巻うひめとう書かかる大ぬれ寄る

ハーひめ乃心をくこてたゆせさふ

内初のうくふ神うぬまこうる

ものもうちのうひめれんせろ　ありみ

うえうくとりゆるうちょゆるきみや

すうゆふはミやきわつかのみれハれ

乃んやうんーうもれをとうれれ心

きんぬんれうくぬれおわゆ拾ゆやく院

乃海母あーきゆ奇うあさまるよ不ほーう

まんてうれ宮れくふぬるーたてまゆう

りやなるのくいうえあわけるよ心まる

やまうわうん源氏をも後心ようふ

かゝるひまて世をそしけるまておりゝゝ
り八条子院御所ありてすませ給ふ比八條
の小路さん座けり後は院あさましく
みやこの御住ゐもものうしくおほし
てうちに山里もちなかりける所にうつわ
住を給ふ兄よわ摂まちすへ宮と申聽ら
れなしおろしてこう給ぬかり君御子君
なめく山ちのあともとも為⊙給ふ八ますよ
いとうつくしき姫め君二人　なそへまつれ

給へるかにえすそのくしくにひてれくなり
なそこなりせ給ふ大こう此みやは入道れ
達光とそおりしまゐる給まかほゝす大
将おわくさのつわてものゝめとふひ聞めて
れよひしほとにひ見君もちふかと思ふ
心あわて膳ひめ君前よりめるおほかこの君
ゐちのいく君い大臣の御女うて於りし
しうゐもうとの君うみありてやうそし
まうめくなうぜ給ふ兄おまつ宮ひしき

ゆて、うくふ〳〵をこなりをかく山の腰に夜ふ
ゝ又山巻小名月をまつくとゝい
てら法師やうくおりゐ法華事にする
事あわかる大ぜをひい寄ぬ中ぬ
ゝをおつくわ山ひめ天たちをゆのうて
かふとゆ〳〵をかりの程ゝ山き秋ハ
まして山里いくとおりゐ風わて山宮へ
思ひ立まわたゆ〳〵やものかくなるまく
よ風ハをとひ屋やうもろかふ〳〵く袖も

いくゝぬまて
山おろしてぬ木ぬ紅葉ぬ霜ぬ
あやゝゝもろ紅葉かなるうふ
をくちゆをとて馬うて入ぬ保ゝ
ちくゝふくまゝゝもゝく孫かゆうる
ゆゆ悠乃ハあうひ夫ぬわうゝき
てうふをくゝて引すををうるちを
ゝくゝゝゆゝをやうゝとゝゝを孫た
かく面ゆくてゝハなを乃ゝき松風おわ

おもひかへしうるはしきてらをたてて
きて給へいはゆる尼寺をもひめ給ふなり
ひとりの人をもつかはして
ゆきへいはゆる山ぶきをかくふかしわけ
ゆくてをたづねて給へりしかはこれ
仏成給ふとめでたまふ山ぶきへ乃わ所の
おもかつ事ハ法師すなをいとをしうせ
とのゝ人よ心成ぬるをせてのきぶくへき
いとあつまをはこけりてはるかなるまき

あきてそらにかゝれるおくれてはを
ちをもはなれてをかくれ多る月をそ
のゝきてあるよきなりてもはいまをく
をるわ名ゆとのまへいとひとわいこと
乃うへにようふきをわれて入はをまを
をとこうゝ人ゝ所ゝこゝにかゝてうち
まひをとをるとをきさもゝをもを
ゝかくうゝをゝうくかよをむりゝ
おもふうわをあふきあてをおもか

巻ハまことに見おとりしたるを
洞わけるうちとりあつまれる
れる位ぬ　四れを　こちたく
まなく　とのゐ人　きあけ
おきつく　河波だ　かつひけ　さか
へ　さてもら れ巻ものうん　見ぬ
如屋ハ山ゆかるえまと　れ内如右藤門
乃ことゑの れとなる世おとろへて乃ち西
国内志越国ゆうゑの　れ　れ　れ　り

ぬ　ふのわりて　は宮ふひめ　見れ　ゆう　ろん
まて　さまつひ　ゆわひめ　見ゆ　ものの　ゆえく
玄に　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ
みやまて　うんの　見宮れ　れ中　れ志　ゆひて
第面　て　む　て　れる　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ
ゆれに　石無　に思　ひて　こ乃　色ん　れ君を
ゆ　ぬ　ま　て　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ
門乃　ゆ　ゆ　ゆ　ハ　の　き　ハ　に　ゆ　ゆ　ゆ
氏玄ハ　乃　て　ま　れ　て　て　ま　ま　て

ゝかるは春のうらゝのあそんれうとぞ
いふなるゆゑなるべし中ごろまたまきゝ小道ひ
文政五年六月十六日かの侍ゑとて
うたゝかをゆりあんせるゝ春ゆゑ
思ふにあひ春るゝ物ゝ所とて春の雨
て見給へはゝうきたわ人ゝ上
とゝふゝ学ゝたるあるゝ所もめつらかす
おうゝくて四篇すまゝ六編くれてはき
乃あゝたやにて枝きゝ人ゝゝむまゝ孫へる

春ゝうゝきるゝうゝや乃ゝ月ゝ海ゝ
事乃あやゝ口行き事ゝ成ゝまゝく
と書ゝ家ゝ所ゝ千年ゝ
ゝ人ゝゝあゝまゝて雨ゝくわゝ
ゝうゝ乃ゝうゝわゝゝをゝうゝまゝて
ゝ乃ゝゝめゝとゝゝ
ゝゝ所ゝ

○二　志井ゝまゝ　山まゝきゝ井ゝもゝく
ゝゝ事ゝほゝる孫哥ゝ

たちよりんのけ必たのうしたぬり木
むの一家よりなるわ よりるかな
とうこうる板形りゆ山うけそくかるを形
りんかとをくもものありまし成けうら
しそれ山乃ちきれよりを備ホ山八入あま
りん必うやひめきへ達ちくるも地宣ひ
をきふうう形ふにっかるも形ちたまる
入うぬ紋れ事れを空ち赤山も以ろ
付てち成うる奇ようるを天ちるあ不り

うあるよいまちうるひ形ひてあるん
あとりひ一ひめ赤うち赤事形とうる
くトを業形てきまく對面も形くて
ひふくくなる形一事あるるくて
赤ものひとげちうあ山かり
り おとちきる赤形 うう形いて
うちえミやいへ りかくれ形て後面形
うる四形てたぬりもち形歌を讀しも
たぬりもと字治のまう形と以事一

あらいうやうのるすに行くて宮かく
れまゝおまへ様せみうちの中やとわ初
瀬まゐりわれとゝまる事ハあわらに巻ハきき
らきせはうろあるべしうあるべし兵部ハ宮
ハういハせくハみやへまゐわ通　みひり
思ふちなを法ふく資さまのよ物ハ卜亜
まのひ藤ま人きまひゆゝくかほ
て俄ふりさへ家ふおかをいうちえ
中やうわしゆゝくれ成ハて山

ひめ君ハちハ泣うへ人も山ハ様うの形とを
ておりまさんとゝ　そりかとも人
目ちくく京ふわ泊れへハ人くにまわ
あひ　ふつ年まかくふくてまくわ形ふ
うちハ中屋うわとハ事ハうれ
中小あまる所きう見ふうわうまわて中箱ハ
人遊ちつせまのわもあまるあわ山海ま
ふううまる

三　あきまる青紙巻ハ形心ハかかる大形ふ

うにはよみえてまつわ一なる
あけまの巻は濁寺繁わをむすひとき
用一こゝ後るこわもあハあん
とゝふ事成せよめる心そうそくに成事
一めこわ此仏事をひ免黒こゝ
形ふりかるもしとくハへんこそわこ
孫氏てよ尺一明わ世事あ孫黒
ぬきもあへもろ紀濃え亜ゑを
なりきちきるをいこ巻ひりん

心ゝ成こゝ孫黒一心ゝ成こゝ
孫氏也ハいもうとの黒をも心ゝ成こ
てろこのこ一りたあ孫黒ふくんけ
てうをひりあ有こ義こ式世事卯
ゆくやう御一う八男こ八心面をて
行一こるふ中宮を一ゑは孫孫こるふ
男ふこをれ走けゝ代を形へこるひとん
こわ貴濃ひてあ孫黒すへこわかくれ新ふ
男わなこひて中孫黒こ中ひよわこまた

あ〜さわげまゝ
きくて何とゆく
てわ
ゑんやま中まち
乃ゝ乃たゝへ
あと〜まう
ゝうめて
きゝくうち
のゝまう

こゝに
やまゝ
あゝむ
てゝ
あけ
ゝひ
あゝ
なわ

てにかけのみやゐ法心もあくがれそく
いふしてかとおもひ行へとりけき道
ふまゐおもふ山しんをんとおもひたまふを
うちへおりゐ海さんを心也船さかきわ
ぬかくやくのうへて文詩作わあうひ行よ
文を山おうひよ法ものくひ山中
やうわよりこなりめやらまゐふ法宮かを
さわともて日を須よあわなんうちうへん
みちゐいえうかるは山かるよるを心ゐ行へ

空めうまひをうわはまゐ人まをすきるまち
行へて水おもとうきたうひ庭のうちを
とうせうへ行こうへ形とまゐよう用
うわ大宮ハ山つひとそうんたちめ文
方夫ひとなてまうわてくうくゐき法
あわ業人すくふうそよのたゐふなわ
ぬへしこうしあまゐ事まうりそ心
なゐへむゐくかくうわ行よまうるも
へるうもさうおりつんせんうくゐ

くかのみやの宮さまハさてもあわ
ぬ〳〵ちりきほとにのくさわかり
てむなしくなりぬ所の住ゐ山かつ
あんやけの御ことなかふもあわはうくるを
こゝ世我も世にあるうきかハ強こそ
かゝるかなしとあるくあ物君かりめし
うわてをとゝ阿ちむとをくしを成
ゐてをりて大ねとのおりうるゆ山中
の君をうゝ我方先思ひて見まわ行ハと

かゝるくるひをきて海とうゝ廿六ゆて
かゝをを大ねいかきうわ物くおりひあけき
てすてゆ内心ミゆ我わし教へも海わ行
ひかりろけ乃ゆ〳〵うてあるうとうる
くゆわはとゝひとゝもあわ比冬海きて
ゆゝふ墨さひくゝゆわはひ宮行あて
つをわひてうくうてはうわとけ
さわをも船もけいとゝあけ紀くハ
へかゝうやうの事をはくつ　あき

まゝき　西海道よりしおけきあとゝなも
こゝのよせて清くつし毎乃かくちゝ斎
頼まて増生しあてといふ事なるへし兇ホ
在秘梨字治川しあとも法くへし
四　きりつひ　此巻ハきりつひといふ事
はうれうくのみやたへのみおわりして
頼ん佛子とゝのもあすわいのおわりも
おわりし　まりしたわしひし里えうよわ中
乃毘んやあ頼君哥しをとれてたくひとわ

なかめおきしまして雨ハ妻路まし免るゝ
わうひ清くくしおもしろ歌るに
哥しへてそてまの清るかくそて
此妻ハ語るり見せん千貴人路
形んにも清るめるゝ◯乃き見るひ
世よみなそれまた清里しゆく　なりしさま
そわりひハまちゝよも清けへしさそ中まん
思妻頼覚わをみ頼ふにも妻やむりし路
ゐとられて我方ひをわをうるゝ纡ふ以捨

乃こゝろわう宮乃うくひひよとなげけ
すゑとあはきゝ孫ゝらゝぬんゝうせ孫
ゝ
ふも屋うゝちまきわてあ孫きみゝあけ
東をゝ見孫ゝさて山巻ゝにかふ兵敷
てゝ孫へゝもゝへゝゝき孫ひていとうゝゝ
ゝ天国　のゝ里ゝゝまる　古孫ゝふ
ゝ内わゝひ　孫ゝ孫ひみたゝを見ん
すゝる　みやこゝへゝゝる　なゝゝゝゝ事
もあゝゝ多ゝゝうゝゝ孫ゆきみい

ゝる里乃名孫ゝ孫ゝき心孫ゝをさを孫
ゝしうゝ川ゝう孫ゝき潮孫ゝゝゝる
もをゝ

○

ゝ　屋ゝうゝ木山まきやゝわ木ゝゝ
かゝる大孫乃ゝうゝ孫ゝる宮ゝて哥ゝ
やゝわきゝ思ひゝゝひけ木乃ゝゝ孫
孫孫もゝゝゝさひゝうゝ
ゝふ哥孫せ山かゝうゝ乃大ゝうせ孫ひ
てゝ乃ゝ年月宮ゝ孫ゝかゝる大ゝあけ

新わすれがたき中にも思ひ出る事
ども多くなりて京よりまをばうち
の宮なる人あるをたのみて寺になりて
みやの御方のおかたをたのみきこえ
かたらひ給へんをたのみきこえ
わたりかりまてかの山ゐ事
ゐるやうにへんの思ひよりて侍
に明かしくれぬ宿もわすれ
かりまてしてまく

かりめりしてくはも度ありわ
まのひ形かたをらけまきよにかり
兵部てゐ見やハタきわれ太臣ゐ山ゐを
めゐれ見ゐ事をしうちあるせきとく
ゐてと歎めうをまきあるい彼みやを
かきわ事かりめりて絶られ
ふミゐてゐ一りの思ひきむまを
かふく心うわかりふあけきたまゐ
なりはきんなわゐよ八月うわうわゆ

きゝわたりたるに折しもまれにしもまたゞいより
なくやどの思ひしほにしくもやまちかき
いそかん頼む心ちろさ人屋はあまたれど
やまぐちしをてけりあまりあはれ
するらむはなる浦まくらをかたふけてく
ふるあきし秋の夜の月をやうくすみ
乃おわつひ屋やりなる風もふきし秋
ならしかくせぬしあはれしる山里
のけしきぬとかうる小

山里は松のけふもなくさむ
すみよきむ秋の風はなかなき
空よりしなわあうきしろわり山さとれ
すまゐよわは都住なをとふ事し捨
乃うちめし事のありをて付てし心頼ま
もんやかやうに夕きわの如くりよそせ
孫ふよりかる大の中さへの事なれは
かの中の君をは御子孫とかくたわし
たる事なれは常よ此宮へもおりかよひ

たまふ事一ときはせとまんうらめしき
物思ふとして夜ゐるまて行一きう
ていくあり久しまとうはけきともりひ
ようてしまいのうはりきみかき
と宮とりめいてうつりの見ねかうちとけて
心あひ気うこなまをみやゐりとうう
おちまてみう気あきのあれをもの
うとはらかさ祇て源ゐ嫁ふきむすふ
を花のもとうわうとにさ出てうち

まくをは浦一て宮なりきほと
乃なは一ちうわき源ひて内ひいをりき
とふてまうきちうすきふき
ひそこ弱そこみ張うる
かはおぬ物思ふうきのひく祇
まくたもと秋露きけくて
女思ひ出事
秋うつはのへ秋事祇もおすき
初のめく風よ清久てうう一れ

昭ら又絶ひ一なる和歌世界もきやうれ
あとすゝめひらせ事おほ所ゝやうれ事
きこゝもる所てはくゝしを所をあなり
ち字治ゝは付ゝ一すてゝ歌よの所へる
時乃日一也かかる文ゐれちゝはきゝわ
一四かの中京ゝなゝれ所りゝ一はれ
所ひてにあゝわ志事を見いゝる一
えれひてあわゝとゝ中ゝ此事りゝ
あゝかせゝるゝ一あわ見も宮ゆの

貴ゝ乃大臣ゝかゝ所りゝまれゝれ
あゝかゝはゝれ所ゝ一あゝ所の
かるれひかて歌ゝはれ所ゝるを折て
あゝきのゝゝにきて徒物語と此男
よあかゝ所をゝて事ゝ

ちゝうへてゝうゝへるハゝわゝる白露に
ちゝ星かゝきゝ一何ゝかゝ志花
とよみゝわ一なゝ此事乃ゝゝ後ゝゝ
もあ孫男乃ゆいゝんに志所の古乃女見

[illegible]成り
[illegible]くやしきまでの後
[illegible]ん[illegible]家内うかがふと
[illegible]事にもよわあわれ[illegible]うり世の[illegible]
[illegible]くいひわたふ[illegible]ふ[illegible]もつてくわて
[illegible]りく[illegible]り[illegible]て[illegible]
[illegible]ひ免くしてあまき
[illegible]ひすまやうの乃め[illegible]こ[illegible]中[illegible]
なるの他母乃他免い[illegible]なわ中[illegible]
みやはひしの[illegible]
うそうく[illegible]
たくあらひ形わ[illegible]
やしの[illegible]
すおり[illegible]
[illegible]
に形ひ[illegible]
をうこ[illegible]
[illegible]
[illegible]
ゆ免[illegible]

ゆるほとにかけりかわにもなわ形にゆかま
しそちこ宮の浩きさへ志てせ奉らんと
おもひて此事をいひよりてかくとも
しを於やし給て用ある孫三郎おわ井君形
かこう思る是成奉らんと大形まかなわ
ゆえさるを形ひけま度大将をさしま思ひ
ゑる哥よ
兄人のうしろあらハ方よりへて
こゑしき世とえなれ物にせん

明ところハあってまう形ゑる形見
御とりふゑふつるをさせ形ふへしさて
大将ハたうゐいゑひめ息女二の家を形
いわてゆりわ乃めんかくまうあらん
き体たま貴人の事をまくゆ形にまら八
おしまゐらる形君けでハまうわせる
ゝうちに中やとわして彼へん乃あきの空
ゆふ人あるへまたよりあまいやとわて
もの御なりとするを大将あまき君にか命を

てのうきて見ぬへいかひめ君あそいてく
受て宮の御方なもいかなるはあくろ
おわのぬてつ井よあつあるあの人え事そう
あつ御やうもうきみつ
ふいうちの中や空わりうさまろう
又なとくいつまの中字治そきつ和うち
すてうの中うり菊おけものくうと
みつ事を山まきうかるおわやけ
の四郎ようわをみ殿ん上よう

里とおりてあ二のみやおはおきく
えなりはなり殿きくうにうん上よ
殿のあるとおるあ殿れうまう
うなくうり中ようを比うかる中納言
るなわとわわきまかしあては菊をうけ
ものうて裏うるせ殿ふうちおはうる
まけさせ殿てまろ一殿ゆるひとのまひ
しうハ中納言しておはうそ殿ふ
よのつまえう義殿よさける花かうハ

うら梅乃まくらにかはて見ましを
とりさまし――うち乃はうつゝに
露小あへりきすし花のく菊そんと
乃られ冬ハあきりうあわん源
おりきし花てむこる寂猿ふうくて思ひ
くすし　きのゝわ猿ふ心やりくとや須磨
舞藤乃さうわちつかうし若紫点むし
猿ひてやうてうれ秋大将行陽なとくみや
うるろりを　ふまふ大将はなる事　此巻

よわあさ若壺の藤ええん峰なかなわきま乗
綾大藤門猿ろりこ代つくし　道まそて大将
ふき猿ひ名わ
六　あけまきや　此巻あつまやとりふ恋すり
ほうのうつゝ
さしともしはかむくらやきけき四何ゐ
うきそもあくる面そくきかふ
とゑうるゆへかわこ藤ハ宮え小町かり
源よかくわ都し　源氏そわひめ恋よ母

さらんえの将ぜ山人をすては聲を先
んとをきてうちうまをひちきつみ
きて行けてほとくにつけくことうき
むこと思ひて屋むに我むひりひき
うてぜこうよりわたくかとうちかた
くおれて文乃小方れはもとへまてゆき
てあつけやゆ山小方はゆとのくまうの宮
きこの様うも強そ也くひちわ形ひ
一程よりれとくあきまくおれてい

ほけ年まえ行ところきて三条まうわふ
いとあくくこうきかりゆんを持きる示に
ちくうをきぬさて大れとものうちへおて
てかりへんりあま成ちて成屋わまひて我
かりこ条れうひ示へ行りうとものの
人あつまうこ也そたうやうとのくこ也
とりめりそのやきえ哥形ちかくて
うれあつほき我車ようのきてうちへほ
れてたりてりませ形よりひ家形と

心ゝ　むしろ　面々資
あつまや　との井人ふゆ付へ　あめ
すゝ　ゆ　ゆ　なゆ比八九月せ文
狩ハ志ゝ　うちへ加よりき多まふあよ
ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ
○
七　うきふ　山巻うき船といふ事を
うきふ乃男れ要ふ
五ゆ乃ふ小路いゆゆ　ゆ　ゆ　ゆ　を
山うきふ称うゆゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ

ゆゆ　ゆ乃心ゆゆ山ゆ　ゆゆいあつまやの
きゝをかゆゆきふひてうちにを寄て
ときゝゆゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ
加文後ゆ乃ふゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ
いゆふる人ふんとゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ
ゆて加文ふのもとひをゆふへ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ
まきゝゆて　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ
ふ宮乃ゆゆふへ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ
ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ

まてもちとけてかりまくようちよわ
とそうゝひゝ松にはたらてゝとゝ
うゝて後の形ゝもちてまゝわ
たわゝゝゝゝゝ文ゝりゝそうう
うゝきゝ面てゝ流すゝとゝわゝやゝ
ゝ女ゝなわゝゝゝくゝわゝす大ゝゝう
富貴ハ常ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
にゝきてゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

よゝゝゝゝ紋ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

うんをつかせて、ぶつまるまんきちやう
おうちへはいてもたく大将のおたてこん
ぜ思ひておとけぬまであるぬ人なわ
ぬ猿くれき殿へたうひかほかのひわ
ほるとも思もわかぬちきをうぶ見せあり
つきうんぐうんぐ見あり、うちぬを五枚うる
をまつとよきぬへくおかしまつひて
内方をひてをを見ぬわおかつれ時こう
見をんきをてあきまおうろをあきう

しを思へともあハあきをぬまを
はうふひちまおうろき事をか
まうへなぐうのへ屋わをる心静をと
まわてあきうぬ内うとはをほきひ時
乃まも見ハいうきをんとこうまを殺へい
ぬも思ふ空に見をつうやとかりめ
てぬ小おうぬくかあ久まをおあひ
ぬ五ときうやさてをあわほきうせん
方ぬくうあうをのうきぬくひや

やう風にまとめいとあるまゝくちもか
けあるに侍奇りおきまうけ侍りて内馬
をくわ侍るうれしかわみやけうり
世にたぐひなきはかなき夢かなきさ！たう
なるも道をう奇くしに侍
けるまうう侍りき

源氏もかとく奇神りできうめて
いくわるれを少くむへ多侍
奇とひとりり侍るひまぬう

かとをたけけへて人たうへもかつて
くてもれうしさいはをんうなくいは
かくすへきやう かくてはものいとんを
まやをかつけくみたりてかて侍る
あくり人めもきひかをそちをむへ
川うわをちはは宿侍るわてちいきま
船はのせ侍りてをもすはりるう歳
きはらきたちあしへうんいちていと
うう侍かたうあわ侍りすこのわわて

水をあひて雪なりし紀にうゑなんうち花
の小路とゝりて落船をうて留めたるを見
ゆへなるかきやうあくいはのさまのして
さる人ゐる時ハ未だ見えけるかわかき
見ぬ人を年をふへきみちわおもう爰
をとのまひて云

とし毎さりしうん物うたちうふた
小路り市家すり一数るきくろい
とのまひし市函事うし さて浮舟

乃君とゝいひけ毛扇ゆうわるさ東おろ
させ給ひてはやうわるて市ものゝ小みニ月
ゐうわ給ひをわしうふかうんうす
おりしてあり一家すを百出て落花
ゐと書はせて出るとも立ちう
うひうるゝ常にかくてあるやと市
濃う巻て乃うまひし市おもうを市う
まひ竹うくあるわゐめ山いくにあり
乃ゐう姫をそてうわをうい

すゝ日　うけ　やと　河うわきち

あしろ織うゝ　うゝ　ゝ　ゝ　

行ひたわすれてうちまもる
ほとのゝ方なれはまとをあるけうむ
ほゝうなるを心ちくてあるあくとて
つ意たるかふとをくうゝ後まきわして
ありまもるとくゝ笑てつ再うち比代々
はくひゝもちろこもゝもちくうち
ゝてあるあ前ゝ移へはあこいすきう
かゝえ事をかりひ前てかえゝもちろ
思ひ山を立へかすこへくきむき

すきふゝて除かさゝ貴色ゝ
ゝうゝちゝふさゝまはゝむゝれ
とゝちゝく移ちゝふきゝゝとかのゝは
てめあれぬ事ゝとゝわ あゝめゝるゝ
ゝをへかゝゝひゝとゝに女我をのかゝ表事
乃ゝゝ比ゝ乃ゝちゝてゝあゝ紀なく内め
も叶よのみりハとあゝれゝゝこゝゝる
とだえ孫せてゝふゝひゝ人ぬ保ゝ乃ゝく
ゝゝをゝまゝ ゝき祖にゝちゝゝらひて

哥ゝ大社

宇治ゝ北野き繁わも多えさ一筋
あやゝ山むらたちろさりくゝ
ゝとうゝなわさ道ハ　かさゝき　志ら
船形とも宇治ゝ花付へ　かくて二三日
しきゝわ形ゝ山もけふひゝく
おもふもいとまこうさて宮うま
うわ浦ゝ流ゝ山くゝまてれゝなゝ
きへおりゝ峯わゝ久形かふひゝ山をく

這なわ大社乃つゝひと宮社つゝひ空多え
くゝりあひゝうゝ秋よわうゝあゝ
ゝ稚て大社ゝ方ゝらわゝの井人すへてと
ゝゝいときひゝ見ゝてなゝゝ山あき
ら多て大社のもとよわかゝ宮社事
をうゝ人て

なゝこゝゆゝ比ゝてゝす房乃松
まゝんとゝ乃ゝ折ひけ多ゝ
とうゝへゝまゝ我うゝわうゝとあゝハれ

―おわえ文乃色ハ さくらゝはて あゝ
ゆ志ゝき ―せゝ舞をあゝりゝく心ゆと
ゝ ゆくハさくゝゝゝつ家―みゝとゆゝ
てしさて浮船ゑゝひゝゝゝれていくゝん
とゝ方をゝゝとけゝゝゝ宮おそゝて舞―
給へともとの井人奇ひくてゝゝハも
ハ者ゝす也ゝく以てゆゆひさゝんゝ
あひゝわ分ハきやうもゆけまた後と
てゝ左と舞あくゝろゝゝ女房をえゝ

おりまハ西ハ者ゝよれゝもの人ゝ馬
ふのせん先すまゝ先えのゝ孫を乗ゝ屋を
ゝを出てきぬハ地をゝゝわてゝゝゝひてゝ
ハ出ゝるゝて先をゝひゝん移ゝるゝゝゝハ
まてゝまのゝわゝあひて物ゝゝ移ん西もふゝ根
ゝゝ乃あゝふまを―きて行ゝゝゝむゝゝ
ゝけゝ山ゝゝ乃家ゆゝ絵ハ下ゝ移ゝ
ゝてまゝわて移ゝく物乃ゝまふゝゝと
ひゝゝゝハぬ者ゝゝゝとなゝゆもんゝゝく

ゆうろ〜もとらせ巻えていなり行き
ぶすてよりあひかうるハ夢　やま
うつえのきりか　墨ひ高ひ犬ひこ色あ
わきく　あといつまを浮あとにけけ
てさてかくむ夕をみやなりせ
ぬ伝法院をけまを後ばまを花もうく
ちちなわかくて犬ハ写絵　海原よ
をきまをうう宮もおりまをゆくゆき
むりんをまんて使くわ行ふ文をうた

ちう先ととりんを而て後心乃まゝよ新
て内ゆ行と乃宗九宗わうるある而ハ
うつろをちんと人きまひうまん行んば
ゆくなわちつまよるかとこりれまきわ
て先ふかくう我分なきものの小船きん
や先思ふなわけよこりわなわ　や川
の者をきてくゆも我方ゆをきゆありれに
てうハ学ぬよ袴ちうわきて人行祢をる
海ふ行まを戸ををあきてゆくをきゆも

ちらしかかに神をあてゝ涙もせぬあへ
ひえんよりをはしみうとおろして題をもて祈
こゝも我をつまこゝにけりとの美入多
まひやゝ笑しき男おなる我しけるな
いかほくまでもいさせたまへかゝて
義いうきてりばけ立うだまなわとわ
ゆて平小院おうの後に大形る未れ不小
すて春わしを小野孔あまの初潮うわ白
ふひ行けて面て小野へ行てやりく

うちしあをさをかるりわて人かして
ろらあさまかりの寺孔を　うちあまま
とふ事もをへうるまはとう形比
三月京の事なり
八　けろよ　山巻かきろよ光の事
うきみまあとうなくうを後ほる後
絵ひしせ　けろふ孔とひうの我見て
をとうてをわとう意たうあくて
りす唐ちうひ美しゝ孔ふ

光よみ侍りゆく也さて浮舟うをだ
よのこさしあとゝ思ひ侍りつゝ八月
ふけぬきをしまるる八月十五日猶猶く
て御ものきこえわ光る源氏あ
と況我こゝわあつめ きる遠野ふをこゝわゆく
傍なる紀ゝのりとふをこゝろかけろ心
ゝ事あるは あとかゝる事あれハ
きこえこゝろこゝわ ふすまう屋 けゝわたる
物と侍りて文ハ侍りこゝ浮舟あけぬ

ゝ
ゝ
ゝ

もりの人、素盞嗚尊、たくさんとてあひ
をしてすゝ目にむかふる
をもうるにうゝせさせまきよわて
あらひ流れとりあつめをのくあ
さ乃とわしうめそ此五八十りう成
さくはとひきはまてりうせへまゝわて
下向ゝ宮沼ゝて、やとわ氏五代あゝ山ゝ
たつゝ家ひゝ目ゝてあるも侍きあわ
宮ゝ原とまうゝ乃社未ゝ見もゝ見あゝ

きゝ乃有ゝとゝ乃くゝきゝ乃て久ゝ世はゝ
うゝゝき笑きゝ世の白きあやゝうゝわか
あなゝてなゝぬゝあゝ乗袴りわきをわ
あゝ初御ゝて美をみゝうわゝて此屋にゝ
ちかゝとゝて宮て行て有ゝ宮ゝいゝとゝ行ゝミ
けゝる社ゝ此五乃むゝあゝうゝあゝくゝなわたわ
ゝゝゝこ首を忘きゝすを乃へてゝまゝき
くゝかゝうの人をゝて首笑ゝ此かゝりわにと
ひわゝるゝゝむゝゝき事に思ひて

あまのはしだて初潮へまゐわうの御男に山うち聖
くるわ形だわらくるこゝろひて尼ゑ成きゐ
かくてさまく形ゑ思ひ初ほうゑ
とゐけむとしていてそわ一ゑと思ひ人
にゐきて形とゐ一かたゝの方法抜く傷
きうひいく成ゑんとあきこうくて
方成おけ一瀧の河ぶちや奇潮ゑ
きうくみうきてさまゐゐくゐ
月ぶたり一ゐきゑほくくとふゐて

心ゑは秋ゐ抜てゐへをわかゐとも
なうむゐ袖ゑ露うほうて
秋ゐく成ゐ い大方のうゑえけりひゐ
ありきゐくゐまして物思ゑ抜てけうへ
形りゐやゐて一ひゐみ原ハタきわ乃み
原ゐ不形ゐいき一山里うわいゐまの
ゐわて山にうきたる雲みきハ松のけ
きけく風乃をともいとゝ心加そし山田え
ゐゐ原とうゐかそわき女ゑ雲あううひ

[illegible]
[illegible]
[illegible]

さうわれ石山をせめ出方先さい
も世をとりて居きくむしまき形ひて出形
をひらるをさうへいの肌修ひて出ん心ゆ移る
ところ明くいらをだいせ事もゆ免
のこらくまてゆ一ゆ面くの侍ゆけき
をきんちきうてて雪ゆかるを移ゆ人
うやうにこいおわくゆ飛わいをる物淀
もをもむしゆうをこ事しめんゆ
ゆまいゆ義ゆてとこ心ゆせうきをこえの

やひらるゆ免ゆうゆ賞りりどうわさてこ
山巻ゆ大将きて男ゆ移ひて山巻ゆひ
お君若おくひこちゆこうゆ子をむゆお
ゆくめゆ小出ゆて侍ゆりを所ゆを出つひ
ゆてゆこ小野ハ侍ゆいをこをるへゆく
ていいくこてゆかゆ人をあまるゆ事ゆと
をうう侍ゆおゆかをて文をひ大ゆお
ゆこをうんてゆゆしなわ大ゆゆ
侍ゆこゆこゆこゆめるゆ
ゆこをるへこて

おもてぬ心に姿をうつかる
心あり〳〵ぬ此内てよんて四自ひもさ
ゝ〳〵なるをうてあるひ美恵のう後
乃うちさうう巻めはせ事もいくうや
あきれぬるやうにてあしとあんあわ
そ後山ち乃霧とうあ和さと人はくわてうを
あして第面〳〵於へるとはそわはを代
五十四てうの深う五後はう後の事志る
さし